

## 日本フェアプレイ大賞 2020 大賞作品

学校名	四国中央市立関川小学校 6年
氏名	萩尾 菜成（はぎお らいせい）
タイトル	太鼓祭りフェアプレイ

ぼくは豪華絢爛な関川の太鼓台が大好きです。金の糸で刺しゅうされているところや、組んだ木が人の動きに合わせてギシギシときしむ音などが特に好きです。祭りの時期が近づくと、心がわくわくします。太鼓台といえばやっぱりかき比べです。大きくて重い太鼓台をみんなの力で差し上げるところはとてもかっこいいけれど、タイミングが合わないとうまくいきません。みんなの息がぴったり合って、太鼓台が天高く差しあがる瞬間を見ると、ぼくも気分が高まります。これは、太鼓台の美しさに対してだけでなく、一人一人のかき夫が仲間を信じて自分の力を出し切っている姿を見ることができからです。

フェアプレイと聞くとスポーツの場面を思い浮かべる人が多いと思いますが、ぼくは、地域の太鼓祭りの中にもフェアプレイの精神が発揮されていると思っています。誰かに何かを言われるからではなく、自分が精一杯頑張ること。そして、相手のことを認めてリスペクトすること。これがフェアプレイの基本だと考えるからです。例えば、関川の人たちは自分の地区の太鼓台がかき比べで優勝を逃しても、優勝した地区の太鼓台のかき夫の皆さんに心からおめでとうの拍手を送ることができます。立派なフェアプレイの精神だと思いませんか。ぼくはそんなところに、勝ち負けを超えたかっこよさを感じます。

繰り返しになりますが、ぼくは関川の太鼓台が大好きだし、関川に生まれたことを誇りに思っています。だから、今日からぼくは、もっと強くなります。もっともっと心を鍛えて、自分のことも相手のことも大切にできる人になります。今のぼくが、十年後のぼくを見たときに自慢できるように、ルールを守り何事にも節度をもって生活します。また、感謝の気持ちを忘れずに、自分自身に恥ずかしくないように判断して行動します。そして、仲間を信じ、みんなのことを大切にす関川の太鼓祭りの精神を受け継ぎ、バトンを次に繋げます。

## 日本フェアプレイ大賞 2020 審査員特別賞作品

学校名	信濃町立信濃小中学校 中学3年
氏名	高遠 愉仁 (たかとお ゆひと)
タイトル	伊藤先生が教えてくれたフェアプレー

僕は、サッカーを中学一年生からはじめてもう2年が経ちます。サッカー部の顧問の伊藤先生は、いつも

「道具や相手に感謝しながらサッカーをきなさい。」

と言っていました。そして伊藤先生は、対戦するチームの選手に対して「敵」と言うのではなく、「相手」と言っていました。僕は今まで対戦するチームのことを「敵」と言っていました。だから少し違和感がありました。伊藤先生と数ヶ月接していて、なぜ「敵」ではなく「相手」と言うのかが分かりました。それは、自分のチームと戦う全てのフェアプレーという意味で言っていたからです。僕は、フェアプレーとは、ファールをした時に相手選手に手を差し伸べたり、試合が終わった後に相手選手も握手するなど、試合中にやるものだと思っていました。しかし、伊藤先生は試合中はもちろん練習中、そしてミーティングの時も相手に対してフェアプレーをしていたのです。それが分かった時、なぜか「敵」のことを「相手」と呼ぶ違和感は、不思議と消えていきました。僕が伊藤先生を見習い「相手」と呼ぶようにしました。そしたらサッカーのコツが少しずつ分かるようになってきて上達していきました。

伊藤先生は、いつも

「道具や相手に感謝しながらサッカーをきなさい。」

と言っていました。しかし本当の意味は、道具に感謝しながら相手にフェアプレーをきなさいという意味だと僕は思いました。そしてフェアプレーを続けると上達することを確信しました。

僕はサッカー部をあと3週間で部活を引退します。僕は部活を引退する前に後輩に伊藤先生が教えたことを伝えることが最後の使命だと思います。残り3週間フェアプレーをやり続けて後輩にフェアプレーの本当の意味を教えて引退していきたいです。